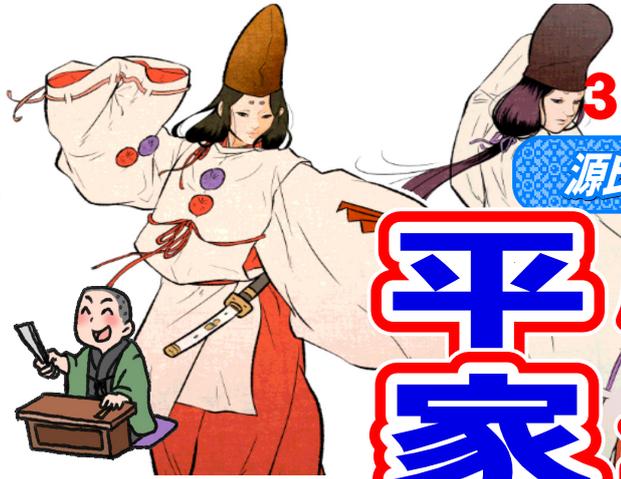


3 回後編
源氏日報

歴史講座 平家物語



した。

と、ここで話が終わらないのが悲恋の奥深さ。

屋敷を出た祇王に、清盛から連絡が入ります。それはなんと、

元気がない仏御

野洲川から祇王の故郷の村に引かれた水路は、

祇王井と呼ばれるようになり、

今もそれは祇王井川という名で

残っています。ふつうだとう

いう時に、高価な装飾品などを所望するのですが、故郷のためになるものをリクエ

ストしました。それだけで祇王の人の柄が偲はれます。

しかし、時の権力者というもの

はすぐに心変わりするものが常です。清盛も例にたがわず、

新たに出現した仏御前に心移してしまいます。

そうなると祇王が目障りになっ

てしまいます。ひどい話です。ついに母、妹と一緒

に屋敷を追い出してしまいま

した。

ています。

竹林におおわれた参道、一面に苔むす境内。鮮やかな緑の多い寺は、

悲恋の舞台とは思えないほど美しい佇まいです。

「祇王」は本当に実在したか？

平清盛が全盛を誇った平安時代末期、

本当に「祇王」と名乗る白拍子が実在したのでしょうか。

「祇王」「仏御前」は「神」と「仏」を意味し、

秀でた白拍子を意味する普通名詞として『平家物語』で使われたにすぎないとする説もあります。

一方で、「祇王」という名前の女性が存在したという証拠もありません。

最近まで玉桂寺の寺宝であった阿弥陀如来像の胎内から出た寄進者名を

した文書に、「女祇王」「祇女」の名があったとのこと。

この阿弥陀如来像は京でつくられたことが明らかであり、

胎内文書の日付は建暦二年(1212)となっ

ています。

「女祇王」「祇女」という女性の固有名詞が記された阿弥陀如来像造立の時期は、

清盛の時代とひじょうに近接しています。

祇王の出身地については野洲市中北とする伝承が

もよく知られていますが、紀伊国粉河村出身とする説も

あります。仏御前については、『平家物語』で「加賀の国

者なり」とされています。

「仏御前は加賀国能美郡中海村原の出身で、

のちに故郷に戻り、庵にこもり余生をすごした」と、

石川県小松市原町には、「仏御前の里」という大きな標識も建てられています。

伝説は、いうまでもなく史実ではありません。

祇王・祇女・仏御前が実在したのかどうか、

そして清盛をめぐる彼女たちの悲話

が事実であったのかどうか、真相は分からないままです。

しかし伝説は、歴史の背後に存在した当時の世相を物語っ

ています。

祇王や仏御前に代表される白拍子たち

は、権力者の横暴に対する庶民の

声なき声、平安期に高まった浄土信仰、

さらに地方農民の水利論争

など、伝説が豊かな土地は、歴史がそれだけ豊かであることを意味します。

滋賀は古い歴史をもち、

数多くの伝説を育んできました。白拍子・祇王の実在を確かめることは困難ですが、

伝説の中には存在する歴史の真実を読み取りたいと思います。

現在、野洲市中北には浄土宗の妓王寺があり、

近くには「祇王・祇女誕生屋敷跡」と

つたえる小さな広場もありま

す。

一方、野洲川から取水した

農業用水は祇王井川とよばれ、

江部荘を取り囲むように流れて琵琶湖にそそいでいます。

では、確かに祇王が野洲郡

江部荘中北村の出生であるか

という点、それを実証する史料は

実は何処にもありません。

『平家物語』では仏御前を「加賀国

の者なり」と述べていますが、

祇王の出身地についてはなにも語って



近江生まれの祇王は、母と妹を伴って京都へと出てきて、

妹とふたりで白拍子になり、清盛の寵愛を受けることになりました。

蜜月はしばらく続き、清盛は祇王の願いはなんでも叶えてしまうという愛ぶりだったと伝えられています。

その1つが、あるとき祇王が生まれ故郷の地の干書を嘆いたところ、それを聞いた清盛が、

すぐさま水路を改善したとも言われています。